

地域生涯学習システムの構築と大学の役割に関する実証的研究：
徳島県立総合教育センターにおける地域リーダー養成プログラムを事例として

廣渡 修一*・濱田 雅子†

A Study concerning the Development of the Regional Lifelong Learning System
in the Tokushima Prefecture and the Role of the University Staff :
Through A Case Study on the Training Program for the Community Leaders, planned
by the Tokushima Prefectural General Education Center

Shuichi HIROWATARI and Masako HAMADA

<要旨>

本稿は、徳島県立総合教育センターが主催する女性地域教育推進者養成講座等、地域リーダー養成プログラムを事例として、企画担当者並びに受講生によるプログラム評価を中心に、筆者の考察を加えて、プログラムの実態と諸課題とを実証的に吟味したものである。また、本プログラムの実績を踏まえて、大学と行政の連携のあり方に対して考察を加えた。大学と行政の連携の現状は、未だ初発的段階にあり、今後の課題は大きい。双方が、そうした現状について共通認識を持ち、教育実践を積み重ねつつ、それらを対象化して、課題を抽出・共有化することが必要である。その際、時代の政策的動向に埋没せず、双方にとって真に有意義な連携のあり方を模索する必要があることを指摘した。

<構成>

はじめに

1. 徳島県立総合教育センターにおける地域リーダー養成プログラム：目的と方法
 - (1) 地域リーダー養成プログラムの発足と概要
 - (2) 地域リーダー養成プログラムの評価
2. 地域リーダー養成プログラムにおける大学の関与の実態と課題
 - (1) 平成18年度プログラムにおける関与の実態
 - (2) 大学の関与に対する評価と課題

*徳島大学大学開放実践センター

†徳島県立総合教育センター生涯学習課

はじめに

徳島県における生涯学習の推進センターとして発足した徳島県立総合教育センター（以下、センターと略）は、発足当初より県民の生涯学習の推進を図るため、県民カレッジの運営、県下5大学との連携をはじめ、地域生涯学習リーダーの育成に積極的に取り組んできた。この事業は、センターにおける生涯学習主催事業の中心に位置づけられるべきものである。その実践活動の質量においては、他県における類似事業に比しても遜色がないばかりか、年々歳々進化しつつある事業内容を伺うかぎり、全国的なモデルケースを示唆するレベルにあると言っても過言ではない。

センター事業が拡充しつつある実態を、大学の立場から観察してきた筆者の視点から見るならば、その驚くべき進化の裏に、実践意欲の横溢した職員の存在があり、その識見・人徳に誘導された多数のボランタリーな人々の存在があることは自明である。本県における生涯学習が優れたりーダーシップに恵まれたのは、偶然のなせる技という側面を否定しさることはできないにしても、自由で柔軟性に富んだ思考を許容する類まれな職場環境によることも事実であろう。昨今の財政状況による事業の切り下げを最小限にし、レア・リソースの最大活用を図ろうとするセンター生涯学習課（及び職員）の働きには、敬意を表さざるを得ない。

さて、本稿の主対象に当該プログラムを取り上げたのは、これまでの研修事業の多くが、学習形態のほとんどを座学や見学、精々ワークショップ等による問題解決学習を取り入れることに終始して、それ以上の取り組みにまで発展していない状況への、アンチ・テーゼあるいは問題提起の意味を始めたからにほかならない。

本事例は、全5回のプログラムであるが、最初の4回は、現場研修と理論学習、及びワークショップを組み、その後7ヶ月間のインターバルを介在させた。その間に各グループは、地域に帰って実践活動を組織化し、実行に移した。その結果を持ち寄って、最終回にプレゼンテーションを実施し、相互批評を行ったのである。7ヶ月という時間的経過の中で、それぞれのグループが企画したプランを実践に移すという、＜実践性＞を極限まで組み込んだ点に、このプログラムの特質がある。本稿の記述は、従って、プログラムの目的や内容を述べるにとどまらず、プログラムの方法論に対する課題意識を強調するものとなった。

ところで、センター自身、発足して3年目という若い施設であり、職員も代替わりによる交替を余儀なくされているとは言え、受講生のアンケート結果をみるとまでもなく、短期間における実績は大である。本県における生涯学習を行政的にリードするセンターが、今後10年の歩みを見据えたとき、現状を変革して更に事業の向上を図れるかどうか、その要諦の一つは、既存プログラムの徹底した点検評価を実施し、課題解決への道筋を見出せるかどうかにかかっている。その意味で、プログラム担当者を共著者として迎え、数回にわたる厳しい討論によって論点や課題の吟味をなしえたことは、大きな収穫であった。そうしたメリットが、今後の県民の生涯学習プログラムの質に反映され、地域リーダー養成事業の一層の拡充に寄与することを願うものである。

本稿の執筆に当たっては、センター生涯学習課の全面的なサポートを得ることができた。また、受講生として参加いただいた方々の真摯にして率直な意見を拝聴することができた。1年という長期間、学習と実践の意欲を燃やし続けてきた、職員及び受講生に対し、深甚の謝意を表するものである。その上で、今後のるべき方向の一つとして、本県における地域リーダーの育成過程に、受講生自身（同窓生をはじめとして）が参画することを期待したい。そのことによって、ともすれば専門職主義（大学の関与も含めて）に陥りがちな事業のマネージメントが、主体である県民自身の責務に帰し、県民自身の貴重な経験とノウハウが適切に埋め込まれた優れたプログラムづくりが可能となるに違いないからである。無論、のこと自体容易に成し遂げられるものではなく、長期にわたる緻密な戦略を要する課題である。とは言え、実践面においては、管見の及ぶ限り、既にその展望を切り開きうる次元に到達しているという感想を禁じえない。

本研究は、しかしながら、こうした展望を内包しつつも、まずは現状の正確な認識を期し、諸課題を抽出して、爾後の改善にいたる道筋を探求する第一歩として位置づけている。行政と大学とのコラボレーションは未だ初発段階にあり、性急に今後のヴィジョンを語るまでに至っていない。行政サイドの求めに応じて大学が関与するという現行のスタンスだけで十分なのかどうか、更に多くの実例を重ねる中で検証される必要がある。しかしその前提として、この度の共同作業におけるよう、とりあえず現実認識を共有することが不可欠である。こうした試みを累積することによって、双方が新たな地平を拓くよう不斷に努力するほかはない。

1. 徳島県立総合教育センターにおける地域リーダー養成プログラム：目的と方法

(1) 地域リーダー養成プログラムの発足と概要

a. 県教委10カ年計画（徳島「学び」プラン21）と総合教育センターの発足

① 県教委10カ年計画（徳島「学び」プラン21）と生涯学習

徳島県は、平成12年3月、以降10年間の本県教育の要となる教育振興基本構想を公表した。『徳島県教育振興基本構想 徳島「学び」プラン21 育てよう一人ひとりが輝く徳島』（以下、学びプラン21と略）がこれである。¹⁾

学びプラン21は、平成10年6月の、県教委委員長より徳島県教育審議会になされた諮問（「徳島県教育振興基本構想について」）に対する答申という形式をとっている。この背景には、現行学習指導要領の基本理念を提起した中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」（第一次答申：平成8年7月19日、第二次答申：平成9年7月6日）があり、その他一連の国における答申行政による教育方針の明確化（「ゆとり」の中で「生きる力」を育む）、並びにその背景となる我が国社会の変動（国際化、高度情報化、少子高齢化、環境問題、価値観の多様化、科学技術の進展等）に対する認識がある。

諮問は、本県における教育課題を列挙し、少子化による児童生徒の減少への対応、学校週5日制への対応、心の教育の推進、中高一貫教育の導入等を挙げる中で、その第一項目として、生涯学習

推進体制の整備を挙げている。教育基本法が改正（平成18年12月）され、生涯学習がその第3条に明確な規定をもった今日的視点からするならば、当時の国の教育方針に忠実に追随したものであるとはいえ、生涯学習を基本構想の一番目に取り上げるという“英断”は、当該審議会並びに当時ににおける県教委の“開明度”を表すものと言ってよいだろう。

審議会は、全7回にわたって全体会を開催したのみならず、小委員会を8回開催すると共に、「教育に関する意識調査」、「教育を考える県民の集い」を実施し、「愛称・サブタイトル」の公募まで行っている。

学びプラン21は、このように、「特に生涯学習の視点を中心に据えて策定した」ものであり、平成12年度から平成21年度までの10ヵ年の本県教育の基本的方向を定めたものである。学びプラン21の基本目標は、「豊かな心をはぐくみ、生涯にわたる『学び』を実現する教育の創造」とされている。

さて、学びプラン21は、「施策の基本的な方向」として、次の7つを挙げている。

1. 豊かで活力ある生涯学習社会の構築
2. 生きる力と豊かな心を育む学校教育の推進
3. 社会参加・自立をめざした障害児教育の推進
4. 豊かな学びの支援と地域づくりをめざした社会教育の推進
5. 人権文化の創造をめざした人権教育の推進
6. 豊かなスポーツライフを築くスポーツの振興
7. 豊かな「とくしま文化」の創造をめざす伝統文化の継承と芸術文化活動の推進

この内、「1. 豊かで活力ある生涯学習社会の構築」については、①生涯学習の基盤整備、②学習活動の充実、③学校・家庭・地域社会の連携の推進、をサブタイトルにして合計9つの施策が掲げられている。

総合教育センターについては、基盤整備の一環として、「学習施設の機能の充実」の中で取り上げられている。また、学習活動の一環として、「生涯学習ボランティア活動の推進」が謳われ、学校・家庭・地域社会の連携の一環として、「地域の教育機能の充実」が取り上げられている。いずれも、本稿の主題である地域リーダー養成に関わる事項である。

この他、「4. 社会教育推進のための基盤の整備」の中で、「推進者・指導者の養成」が取り上げられ、PTA指導者研修や女性教育指導者研修をはじめ、社会教育主事等の資質向上のための研修の充実、が列挙されている。

これらの各種施策を披瀝した後に、学びプラン21では、「重点施策」として、次の7つのプロジェクトの推進について言及している。

1. 生涯学習推進プロジェクト
2. 生きる力と豊かな心をはぐくむ教育推進プロジェクト
3. 個性と魅力あふれる学校づくり推進プロジェクト
4. 教育環境の整備・充実プロジェクト

5. 人権教育推進プロジェクト
6. スポーツ振興プロジェクト
7. 文化財保護・活用プロジェクト

いずれも、前述の「施策」に対応したプロジェクトであるが、総合教育センターについては、「4. 教育環境の整備・充実プロジェクト」の一番目の項目として掲載され、次のような内容が記されている。

本県の次代を担う人材育成のための先導的な役割を持つ中核的施設として、教職員の研修機能、障害児教育を推進するための機能、生涯学習を支援するための機能を併せ持つ総合教育センター（仮称）を整備します。

② 総合教育センターの発足

a. 生涯学習支援機能の導入

平成12年から平成21年にかけて丸10年の教育方針を定めた学びプラン21は、基本的視点として生涯学習のコンセプトを採用し、学校教育、社会教育を統合した施策の骨格を打ち出した。

総合教育センター構想は、学びプラン21の審議過程において実現への歩みを始めたのであるが、その“前身”は、昭和24年に設置された徳島県（立）教育研究所、昭和44年に設置された徳島県教育研修センター、及び、昭和47年に設置された徳島県情報処理教育センターにある。

その後、構想が具体化し、実現への曙光が見え始めたのは平成8年度であった。この年、総合教育センター基本構想検討委員会が、平成9年度には総合教育センター整備推進会議が立ち上がり、具体的な内容の検討を開始した。この過程で、“前身”における学校教育の支援機能を包摂しつつ、基本機能の一つとして、生涯学習支援機能の導入が図られた。学校教育支援機能と並列しながらであったとは言え、広域的生涯学習支援機能を推進する基幹施設を有するに至ったのである。

総合教育センターのハード面については、平成10年度に基本計画、平成11年度に基本設計、敷地調査、用地取得を行い、平成12年度に実施設計、平成13年12月に本体工事に着手した。平成15年2月にコンセプトを発表、平成16年1月に竣工し、同年4月1日に設置、同年11月1日に開所式を挙行した。

総合教育センターには現在、次の5つの課が設置されている。

企画総務課	学校支援課	情報教育課	特別支援課	生涯学習課
-------	-------	-------	-------	-------

b. 生涯学習支援機能の概要

生涯学習課の業務内容は、学習支援と学習情報の2つに分かれているが、事務分掌の詳細は次の通りである（平成18年度）。

<学習支援担当>

- 公民館に関すること
- 地域総合教育力推進事業に関すること
- 自然体験活動コーディネーター研修に関すること
- 図書等関係資料に関すること
- 家庭いきいき支援者養成事業に関すること
- 家庭教育支援総合推進事業に関すること
- 青年教育推進協議会に関すること
- 子ども読書活動推進事業に関すること
- 家庭教育研修に関すること
- P T Aの各種研修・育成指導に関すること
- 交流コーナーにおける展示・ミニイベントに関すること
- 女性地域教育推進者養成講座に関すること
- 青少年団体指導者研修に関すること

<学習情報担当>

- 生涯学習「とくしま県民カレッジ」推進事業に関すること
- 生涯学習情報システムに関すること
- 学習プログラム・コンテンツの研究・開発に関すること
- 図書館職員研修に関すること
- 視聴覚・情報検索コーナーに関すること
- 学習相談に関すること
- エルネットに関すること
- 子どもの学びの場づくりコーディネーター研修に関すること
- 視聴覚教育に関すること
- 映像資料・編集コーナーに関すること

上掲のように、総合教育センターにおける生涯学習支援機能は、極めて多岐にわたる。学びプラン21では、これらを整理して、①学習施設間の連携・協力体制の確立、②県民の学習ニーズ・学習課題の把握、③学習プログラムの開発、④学習情報の提供・学習相談、⑤施設職員・指導者の資質の向上、等にまとめている。

こうした諸機能を遂行するために、ハード面では、「マナビィセンター」を設け、次のようなコーナーを設置している。

情報検索コーナー 学習相談コーナー 交流コーナー 図書コーナー
視聴覚コーナー エルネットコーナー 映像資料・編集コーナー

本稿の主対象は、地域リーダー養成事業であるが、上記＜学習支援担当＞の業務として明記されている（上掲下線部）。

b. 地域リーダー養成プログラムの概要：女性地域教育推進者養成講座を中心として

① プログラムの発祥（開講まで）

県立総合教育センター生涯学習課では、「共生・交流・連携」の視点を重視した地域づくりのため、指導者の育成等、社会教育推進のための基盤整備に努めている。平成18年度は次の地域リーダー養成プログラムを実施した。

表1. 平成18年度地域リーダー養成プログラム一覧

- ・子どもの学び場づくりコーディネーター研修
- ・自然体験活動コーディネーター研修
- ・家庭いきいき支援者養成講座
(乳幼児期・児童期・思春期・ステップアップ研修)
- ・徳島おやじ塾
- ・女性地域教育推進者養成講座

ここでは、女性地域教育推進者養成講座について説明する。

昭和47年度から平成16年度まで33年間にわたり「徳島県女性教育指導者研修」が行われていた。その趣旨は、「本県における女性教育活動を推進するため、地域における女性リーダーを対象に、専門的知識と技術の研修を行い、進展する社会に対応できる女性教育指導者を養成すること」にあった。

講座内容は、女性の人権問題・子どもの人権問題・消費者生活の知識・生活の中の法律知識・地域防災の知識・家庭での介護・海外への視点・レクリエーションのすすめ方等知識伝達中心の学習であった。学習形態も、座学が専らで、学習者自身が体験したり発信したりする機会はほとんどなかった。参加者の募集方法は、主に市町村教育委員会を通し、地域の婦人会で活躍している女性に呼びかけられた。

33年の時間の経過とともに、社会問題は加速度的に多様化した。それに伴い学習者のニーズも変化した。女性の社会進出が盛んに求められていた昭和47年当初は、専門的な知識を取り入れることが指導者育成の大きな目的であったが、その目的も転換期を迎えていた。平成16年度の受講生に

「今後必要な研修」をテーマに簡易 KJ 法で話し合ってもらった結果、「研修で多くのことを学んでも、地域で実際に活かす機会がもてなかつた。今後は知識だけでなく、スキルや方法論を体験や情報交換を通して学びたい」という意見が多く聞かれた。他には次のような意見が出た。

〔質問 1〕 地域活動を推進するために何が必要ですか？

- 予算・協調性・若い世代の参加・スケジュール等の調整・後継者
- 話し方のスキル・人のもっている特技を活かす力・たのしさ・企画力
- 他の団体等との連携・人の話を聞く力・ボランティアの心
- 学んだことを地域で実践すること

〔質問 2〕 質問 1 で出た必要な力をつけるためにどのような研修を希望しますか？

- ・聞くばかりの講座でなく、話し合ったり体験したりする学習
- ・研修後、実践に役立つ学習
- ・先進的な取組をしている地域への視察研修
- ・話し方・聴き方講座
- ・有効な広報の方法

このような受講生の意見を参考に、次年度の養成プログラムを作成した。

② 平成18年度女性地域教育推進者養成講座の概要と特徴

ア. 講座の概要

少子高齢化がすすむ一方で、社会の国際化・情報化の流れは加速している。以前のように、何世代もが同居する家庭は減少し、核家族化も進んだ。地域のつながりは希薄化し、道ですれ違ってもどこの誰だか知らないことが当たり前になりつつある。「地域」と言われても何を指しているのか、誰が構成しているのかさえ漠然として不明である。都市も地方も区別なく、“負の変容”は進んでいる。

地域をつなげるものは、まさしく「人と人」である。地域には、学校を核とする PTA や、子ども会・婦人会・老人会・青年団等の集団が存在している。それぞれ歴史をもち、活動を続けていく。しかし、先に述べたような社会の流れのなかで、その活動が思うように進まない事例も多い。困難ではあるが、地域社会の再生に住民自身の力を活用出来ないか、ここに一つの要路があるようと思われた。

中でも、経済的価値とは結びつきにくいが、地域住民は、生活の重要な部分を占めている家事や育児・介護等、累積された生活の知恵を保有している。その力を伝えることが、地域づくりに役立つと考える。生活の知恵は、何世代かが同居し、地域のつながりも深かった時代には、家庭の中で、または地域の至る所であらゆる機会に、当たり前の形で伝わっていた。しかし、現在その流れ

が途絶えつつある。

子育てを例にとっても、家庭の中に支援者がいないことが多い。寝かしつけ方・あやし方・関わり方・声のかけ方・食べさせ方等、子育てのあらゆる場面で、モデルをもたない若い親たちは、戸惑い、自信をなくしつつある。昔であれば、近所の先輩母親が、垣根の向こうから声をかけてくれることもあったが、その垣根さえ、今はコンクリートの壁で遮られていることが多い。現在、地域づくりや地域再生に必要とされているのは、新しい知識や技術だけではない。これまで当たり前のように受け継がれてきた生活の知恵こそが、最も重要である。知恵の多くは、家事や育児・介護を率先して引き受けってきた住民の経験の中にある。住民の知恵や力を伝える方法を学ぶ研修が、今日必要となってきたのである。

本講座には必修研修の他に、任意研修を3コース開いた。全コマ必修では、地域で実際に活動する受講生にとって日程的に厳しいと思われた。そこで、必修研修の狭間で、自分の活動にとって必要なスキルや知識を学ぶ機会を設定した。防災頭巾づくり・パソコン研修・家庭教育研修大会への参加がそれであり、3コースから1コースを選ぶスタイルの講座とした。

講座の開催要項は、次の通りである。

平成18年度 徳島県女性地域教育推進者養成講座開催要項

1 趣旨

地域における生活改善、生活相談をはじめ、家庭教育、青少年の健全育成等、地域に根ざした様々な活動を展開している女性に対し、指導者の資質の向上を図る研修を実施し、その成果を地域に還元することにより、地域の教育力のさらなる向上を図ることを目的とする。

2 主催 徳島県立総合教育センター 徳島県婦人団体連合会

3 日程・研修内容・会場

<必修研修>

回	日 時	研 修 内 容	会 場
1	5月27日(土) 9:40~15:00	人とつながる話し方 講師 平木彰子（アナウンスグループカインド代表）	婦人会館 2F
2	6月8日(木) 8:40~18:00	人権問題啓発における婦人会の役割 ～ハンセン病について正しく知る～	香川県高松市 大島青松園
3	6月24日(土) 9:50~16:00	地域防災における婦人会の役割 ～救命講習研修～	徳島県立防災センター 板野西部消防組合
4	7月8日(土) 9:50~15:00	地域の教育力向上のための実践プランづくり 講師 廣渡修一（徳島大学大学開放実践センター教授）	徳島県立総合教育センター
5	2月3日(土) 9:50~15:00	実践発表 講師 廣渡修一（徳島大学大学開放実践センター教授）	徳島県立総合教育センター

<任意研修（どの研修も受講することができます。1講座以上受講してください。）>

日 時	研 修 内 容	会 場
7月19日 午後半日	パソコン研修	徳島県立総合教育センター
7月30日 午後半日	学んで伝える体験講座 ～防災頭巾づくり～	徳島県立総合教育センター
1月23日(火) 10:00～15:30	徳島県家庭教育研修大会	徳島市立文化センター 徳島県青少年センター

4 募集人数 50人（定員になり次第締めきり）

5 受 講 料 無料

6 修了証の交付 修了者（8割以上受講した者）には修了証を交付する。

なお、受講生は50名であり、その属性は次のようであった。

表2. 平成18年度受講生の属性

<年齢別>

年 齢	人 数
70歳代	7人
60歳代	23人
50歳代	16人
40歳代	4人

<所属別>

所 属	人 数
婦人会	30人
子育て関係サークル	4人
ボランティア連絡協議会	3人
その他	13人

<住所別>

市 名	人 数	町 村 名	人 数
徳島市	5人	藍住町	4人
鳴門市	5人	板野町	3人
小松島市	4人	上板町	3人
阿南市	2人	勝浦町	2人
吉野川市	5人	那賀町	2人
三好市	8人	海陽町	3人
		東みよし町	4人

全体的に60代・50代が多いこと、また、婦人会に所属する受講生が多いことが分かる。地域的には、県下全域をカバーしている。

イ. 講座の特徴

講座は、次の3つの観点を取り入れて組み立てた。

a. 体験学習を取り入れた研修

これまでの研修は、その多くが知識や技術を伝達する講義形式の研修であった。受講生は全員前を向いて座り、講師が前で説明する。学習内容は多いが、受講生は受け身的になる場合がある。1日研修を受けても、一言も発言しなかった者も見られた。新しい知識や技術の注入方法としては有効であるが、この形だけの研修では、受講生の主体性や、彼ら自身が持っている能力を引き出すことは難しい。

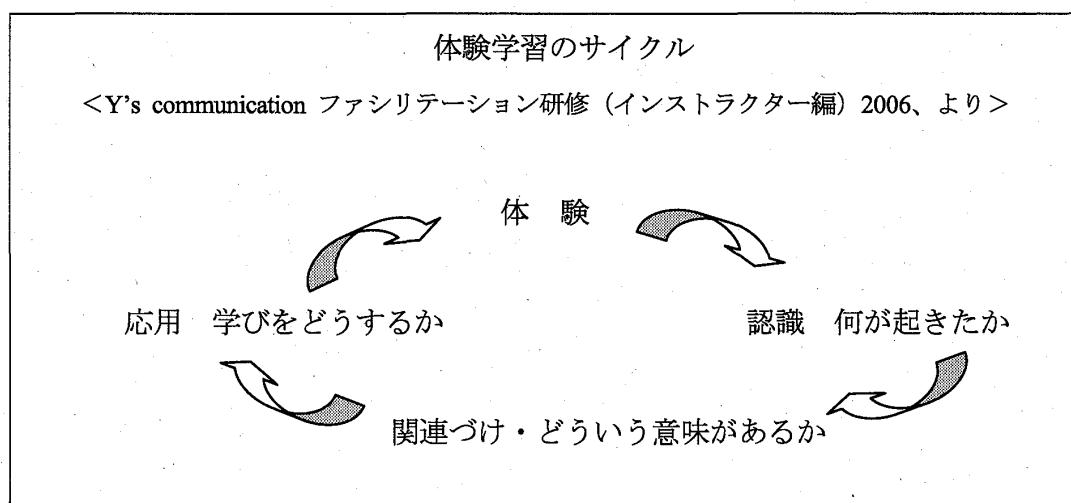


図1. 体験学習の概念図

β. 実践活動期間を組み込んだ研修

一般に、従前の研修は、知識・技術等の取得や話し合い・ワークショップで完結するケースが多くあった。研修の場では、実践意欲が高まっているが、地域での実践につながる事例が少ない。また、実践して出てきた課題を検証する場がないため、活動が深まったり、つながったりすることが少なかった。そこで、研修中に計画したことを、実際に地域で実践する期間を設けることとした。

講座で学習したことを、一回限りの実践に終わることなく、継続して地域に根付かせるためには、学習者自身の主体的・持続的な学習姿勢が必要となる。成人教育の分野で提唱されている自己管理型学習では、次の手順で学習が行われる、とされている。²⁾

- (1) いろいろな人や物事への好奇心を磨き、それをもち続ける。
- (2) 自己について客観的な認識をもつ。

- (3) 仕事上や家庭生活、地域生活での自分の役割を把握し、それに応じてどのような内容や方法の学習が必要かを考える。
- (4) 学習の成果ができるだけ目に見えるような具体的な目標を設定する。
- (5) 学習の資源（教材、内容、手がかり）として、これまでに得られた人間関係、所有物、体験を整理する。
- (6) 学習資源の適切な利用を行うための計画をデザインする。
- (7) 学習計画が長期的にみて体系的にまとまりがあり、また一貫して継続できるよう毎日の学習を心がける。
- (8) 目標を達成したときにその成果を具体的な証拠として残るようにし、その成果を秩序よく整理しておく。

女性地域教育推進者養成講座でターゲットとしたのは、子育ても一段落し、地域活動に参加したいという40歳代以上の女性である。好奇心については、それぞれの地域で活動を続ける、また起こうとしている女性たちには、十分に備わっていると考えられる。しかし、その一方で、彼女たちにとっては、家事や子育て等は当たり前すぎて、伝える内容ではないと考える傾向がある。

具体的な目標を設定するという作業も、普段は意識されていないことが多い。何のための活動なのか、行事なのか、という問い合わせを自分自身に、またはグループに投げてみることで、今地域で必要なことが見えてくるはずである。

また、人間関係や所有物、あるいは自己体験を学習資源として捉える作業は、新しい発見を促進することが多い。日常の生活で繰り返される作業にこそ、次世代に伝えたい知恵や文化があるはずである。自分の中に備わっている能力に気づき、それを資源として活かし、計画的に実践するための方法やスキルを学ぶ機会にしたいと考えた。

γ. プレゼンテーションを取り入れた研修

本講座の大きなねらいは、「学んだことを活動に活かす」ことにある。つまり、「学んだこと」を他者にわかりやすく伝え、広める力が求められる。この「学んで伝える力」を向上させるために、講座の中で2回、実際にプレゼンテーションを行う機会を設けた。1回目は、実践プランニングの発表、2回目は実践発表である。伝える側と受ける側での相違に気づき、わかりやすいプレゼンテーションを体験する機会とした。

(2) 地域リーダー養成プログラムの評価

a. 受講生アンケート調査の結果と分析

講座では、毎回の終了時にアンケート調査用紙を配布し、当日の内容等について評価を蒐集した。

5回の必修研修の初回に、フリーアナウンサーによる「人とつながる話し方」の講義を設定したことは、それ以後の発表・発言の場面に生かすことができ、極めて有意義であった。アンケートの自由記述にもあるように、毎日の生活や地域活動の場に生かせる話し方、話の組み立て方等のスキルを、具体的な体験を通して学べる研修であった、と言える。受講生の満足度も高かった。コミュニケーションの重要性が求められる今日、地域のリーダー自身が、「人とつながる話し方」を体得する意義は大きいと思われる。

2回目の研修では、香川県高松市の瀬戸内海に浮かぶ大島青松園を訪れた。ここは、ハンセン病の元患者のみなさんが暮らしている国立の療養所である。ほとんどの受講生が、初めて踏む島であった。平成8年に「らい予防法」が廃止され、ハンセン病について正しい理解が社会に広がり始めた。しかし、ハンセン病についての正しい知識だけでは乗り越えられない心の壁がある。そこで、療養所で暮らす元患者の方々と出会うことでその壁を克服し、そして、そこで得た「気づき」を周りに広めることを、本研修の課題とした。受講生の表情は、戸惑いから親しみへ、そして強い決意へと変わっていった。「早い時期に、たくさんの人々に正しいことを伝えたい。そして、元患者の皆様が幸せな暮らしを続けられますよう、私たちにできることを行動して参ります。みんなの元気な表情にお会いできて、今日は本当に訪問してよかったです」。代表者の挨拶が、受講生の気持ちを表していた。現地研修からの学びの深さを感じた。

3回目は、「防災」をテーマに、午前は徳島県立防災センターでの体験学習、午後は板野西部消防組合救急救命士による心肺蘇生法とAEDの使用方法を学習した。「防災」に対する意識が高まりつつある中、受講生は本番さながらの真剣な面持ちで取り組んでいた。何度もくり返し、実習し、熱心に質問する姿が見られた。特に、子どもたちや高齢者の方々に対する救急法について関心が高かった。

4回目は、実践を見据えた「プランニング学習」と「PR法とプレゼンテーション学習」を設定した。受講生のほとんどが、「プランニング」について系統的に学習するのは初めてであった。「日ごろの活動は、長年のカント前年どおりの行事計画に沿っていた。今日のような視点で行事を見直すとおもしろいと思う」という声が、グループワークの中で聞こえてきた。44時間の研修中に、準備してきた資料を基に、プランを組み、募集用のチラシやポスターまで作るというハードな内容に、受講生は十分力を出し切っていたようであった。「目的」・「計画」・「評価」という概念で、実践を考えると、すっきりとやるべきことが見えてくるようであった。また、地域も所属団体も違う受講生同士の有効な情報交換の場となった。

4回目の後、7ヶ月の実践期間を経て、2月に実践発表を行った。「発表するほどの実践ができるいないのに」と不安な表情の受講生も見られた。「成功例だけでなく、失敗例や実践まで進まなかつたいきさつもすべて、情報として伝えて欲しい」と受講生に伝えた。一人の実践者が抱えている課題は、多くの場合、他の人たちも同じことで悩んでいることが多い。他の成功例を聞くことも参考になるが、「失敗」や「断念」の原因を互いに考えることからの「気づき」も多い。完成し

たものでなければというこだわりを捨て、学習に参加してもらった。話し合いの中で出てきたのが「人と人のつながりの重要性」、「広報の工夫」、「専門的知識の組織化」であった。自らの実践に不足していたものを考え、どう補って行くかを模索した結果である。

以下、アンケートの集計結果から、毎回の出席数と満足度に関するデータを示す（なお、自由記述による意見・感想については、注にまとめた。³⁾）

表3. 毎回の出席数と満足度

回	出席数	満足	やや満足	やや不満	不満	NA
1	49	42	7	0	0	0
2	35	33	2	0	0	0
3-1	40	36	4	0	0	0
3-2	40	35	5	0	0	0
4	49	34	13	0	0	2
5	34	22	11	0	0	1

なお、修了生（修了条件：8割以上参加）は35名であった。

② 最終アンケートの結果

最終日にプログラム全般にわたるアンケートを実施した。以下、その結果を示す。

ア. 受講生の地域での活動について

① この講座を受講される以前に、地域でボランティア活動等を行っていましたか？

活動していた（23人） 活動していない（10人）

② ①で「活動していた」を選んだ方は、その内容についてお聞かせください。

- ・地区公民館において、ボランティア活動（予算3万円程度）
- ・福祉施設でデイサービスなどに通っている人たちへ、手芸品をプレゼントしたり、ニュースポーツで一緒に遊んだりしています。
- ・社会福祉協議会とともにボランティア活動 ・更生保護
- ・手話を通じて障害者の方々との交流
- ・食生活改善推進協議会 ・高齢者の方々への食事づくり
- ・地域の小学生に「ぶどう教室」を開催。5年生対象に摘粒・袋かけ・収穫・ぶどうのつるでリースづくり
- ・幼児の調理実習 ・地域の公園の花壇づくり
- ・食生活改善グループ（早寝早起き朝ごはん）（小中学生への調理実習）（男性対象にした調理実習）等

- ・東徳島病院の重度心身障害児病棟へのタウンマザーとしての訪問
- ・大塚美術館でのボランティアガイド ・子ども会との交流
- ・福祉施設の入所者との交流 ・JA 女性部活動
- ・地域のごみ分別ボランティア ・海外人形公演のお手伝い
- ・一人暮らしの高齢者への訪問 ・小学生へのお手玉プレゼント
- ・オープンスクールのカレー作り指導支援

③ この講座修了後の地域活動の計画をお聞かせください。

- ・婦人会活動を通して実践していきたい。 ・健康体操をあらゆる場で広めたい。
- ・ボランティア活動 ・すくらむ学級 ・防災頭巾作りを広めたい
- ・義経の夢想祭という地域のオリエンテーリングを開催します。
- ・学童農園を発展させ、食育についても一緒に勉強できる場をもちたいです。
- ・防災頭巾づくり講座の開講 ・地域の環境改善に地区の社協とともに参加
- ・東っこクラブのサポーター参加（放課後子ども教室への協力）
- ・地域の自主防災の立ち上げ ・高齢者の健康相談事業 ・炊き出し訓練を継続する
- ・ウォーキング活動
- ・多くの事をしたいのですが、まずは一緒に手助けしてくれる仲間をみつけたい。

イ. 他の地域・グループとの交流について

① 交流はありますか？

ある（14人）　ない（19人）

② 「ある」を選んだ方は、その内容についてお聞かせください。

- ・他地域の婦人会の方々との連携 ・ミントの会とのカボチャ作り
- ・地区社協のサポート ・YOU ME ネットに参加しサポート
- ・他地域の食改協との交流（寸劇上演を通して） ・隣接の町との連携
- ・読書会を通したグループ作り

ウ. 知恵や技を伝えるために必要なもの（これから研修に必要なもの）について

質問1 地域の教育力向上のために、どのような知恵や技を伝えたいですか？

- ・書道 ・点字 ・体操 ・わらべ唄 ・読み聞かせ ・ハンドベル ・茶道 ・読書
- ・観光ガイド ・民舞 ・三味線 ・コーラス ・畑作業 ・食事作り ・お菓子作り
- ・介護 ・テニス ・パソコン ・子育て相談 ・トラクター、田植機の使用
- ・手話コーラス ・大正琴 ・赤飯、お団子づくり ・植木の刈り込み ・ガーデニング
- ・防災頭巾づくり ・漬け物づくり ・干し芋づくり ・手芸 ・花づくり

- ・ビデオカメラ撮影 ・人形淨瑠璃 ・稻づくり ・お手玉づくり ・浴衣づくり
- ・ぶどうづくり ・歯磨き指導 ・でこづくり ・押し花 ・ウォーキング ・そば打ち
- ・こんにゃくづくり

質問2 質問1で出てきた知恵や技を伝えるために必要な事は何でしょう？

- ・PR作戦 ・人集め ・くちこみを利用した呼びかけ ・会場の確保 ・材料、道具の調達
- ・開催時期のタイミング ・協力者 ・仲間作り ・費用 ・指導力 ・主催者の目的
- ・技術 ・情報交換 ・リーダーシップ ・人に喜んでもらう嬉しさ

設問アにおいては、受講生の活動経験の有無やその内容、講座終了後の活動計画を聞いた。また、設問イにおいては、地域間、グループ間の交流の有無について尋ねた。

この結果、受講生の約3分の2が既に実践活動の経験があること、内容的には、社会福祉や食育、文化活動など多岐に渡っていることが分かった。

また、今後の計画については、防災、食育等の具体的活動を挙げる例が多かったが、仲間づくりからはじめるという回答もあった。交流活動については、既に交流経験がある人も多いが、未経験の人のはうが多かった。実践活動の輪を拡大し、地域・グループ相互に支援し合えるシステムづくりは、実践活動を持続し、発展させるために有効と思われる。今後の研修課題としても検討に値しよう。

設問ウにおいては、まず受講生自身がもっている能力について尋ねた。現代は、生活のほとんどが流通社会に組み込まれ、手作りや自給といった作業が姿を消しかけている。お米の研ぎ方を知らない若者が増えているという。口にしている食物がどこでどのように生産され、加工され、食卓にのっているかを知らないのは、子どもだけでなく親世代にも広がっている。最近「食育」が大きく取り上げられる原因も、ここにあると思われる。もう一度あたりまえの家庭生活・文化を見直すために、受講生のもつ知恵を活かすことができればとの思いから質問を起こした。

回答を引き出すために、簡易KJ法を採用して、グループワークで伝えることのできる技・知恵をカードに書き出し話し合った。最初「伝えられることなど何もない。草抜きや畑仕事しかしていない」と話していた受講生も、グループで話し合う間に、「それなら私にもできる」と自分のもつ能力に気づき始めた。土地を耕し、作物を作ることは、以前は当たり前のことであった。受講生にとって当たり前のことが、現在学校の授業に組み込まれている。「野菜作り」や「土づくり」はその一例である。一方、学校現場では、その指導者探しに苦労している。この需要と供給の橋渡しをするシステムづくりが、地域教育力向上の今後のポイントとなるであろう。

次に、実際に技や知恵を伝えるために必要な学習について、前問と同様にグループワークを行った。ハード面では、会場確保が大きな課題であった。ソフト面では、まず参加者の確保、有効な広報、そして、「人に喜んでもらえる嬉しさ」とあった。技や知恵を効率よく伝えようとすると、どうしても「教える」ことに力点が置かれる。気づかないうちに、「教え込む」・「押しつける」スタ

イルになることも考えられる。それでは、せっかくの機会に技や知恵を学ばず、「押しつけられる」窮屈さのみを感じてしまう参加者も出現しがちである。相手の可能性・できる力を信じて、伝えるコミュニケーションスキルを学習する機会が必要である。また、どのグループにおいても出された課題であるが、「参加者確保」について、有効な手立てを考え合う機会も必要である。

b. 実践発表の内容と評価

最終日に実践発表を行った。全6グループである。以下、グループ毎のテーマ・目的・対象・課題を示す。

① 各グループの実践内容

○ 1班 旬菜カレーブル久りに挑戦

目的 地元でとれる季節の野菜のおいしさを知り、食べる楽しみを広げる。

対象 保健所職員（地域の子どもたち対象には実施できなかった）

課題 子どもたちとカレー作りを計画したが、許可がもらえず実践できなかった。

○ 2班 簡単な朝ご飯作り紹介～朝ごはんを食べよう～

目的 簡単な朝ごはんの作り方を広め、朝ごはんを食べる仲間を増やす。

対象 町内の幼児と親

課題 参加者を増やしたい。

○ 3班 Let's Study Cooking

目的 料理実習を通して、食べる楽しさを伝える

対象 東っ子クラブ

課題 複数回数の開催

○ 4班 地元住民による防災訓練

目的 自主防災組織の強化

対象 山川町の住民

課題 参加者の高齢化

○ 5班 お手玉作り伝えよう

目的 お手玉作りを通して、地域住民のつながりを深める

対象 小学生・老人会員

課題 参加者を増やす。定期的な開催。

○ 6班 阿波踊り体操を広めよう

目的 「阿波踊り体操」の意義と方法を、広く県民に呼びかける。

対象 老人会・県民

課題 参加者の幅を広げる。

② 実践発表の事例と評価

実践発表の中から、上記3班と6班の取組みについて詳細を記そう。これらは、行動目標の設定や自己評価の実施等において、研修内容を忠実に実践に生かした事例と言える。地域における組織化の成功例としても特筆に値する。

α. 学んで伝える阿波踊り体操～阿波踊り体操を小学校の運動会プログラムへ (T氏の取組)～

- 目的 小学生を通して、家庭や地域に阿波踊り体操を広める。
- 参加対象 鳴門市大津西小学校の児童：教職員・保護者・校区内の住民のみなさん
- 期日 平成18年9月17日（日）
- 場所 鳴門市 大津西小学校グラウンド
- 講師 T
- 準備物 阿波踊り体操テープ・プリント
- 行動目標
 - ・子どもたちが阿波踊り体操を楽しむことができる。
 - ・子どもたちを通して、阿波踊り体操が家庭や地域に広まる。
 - ・地域のみなさんが、阿波踊り体操を通して健康に関心を持つ。

●プログラム実践に向けて

平成18年7月中旬 大津西小学校へ電話連絡

8月1日 大津西小学校訪問（計画説明と今後の予定について）

9月5・7・13日 練習会

9月17日 大津西小学校運動会

●大津西小学校の児童の表情・様子 (T氏の感想より)

3日間の合同練習・本番と子どもたちの表情はいきいきとしていた。ミュージカルのように174名の児童が全員でひとつの動きをつくるのは見事であった。運動会後、学校を訪問した講師に「阿波踊り体操の先生！」と言って近づく無邪気な子どもたちに心を和ませた。

●プログラムの成果

運動会で「阿波踊り体操」を知った地域の老人会や女性学級の方から指導依頼がある等、「阿波踊り体操」の意義や存在を広く家庭や地域に知らせることができた。

●今後の課題

- ・運動会だけで「阿波踊り体操」を実施するのではなく、普段の授業の中にも「阿波踊り体操」を取り入れる機会の提案。
- ・大津西小学校だけでなく、他の校区へ広げる。

●プログラム実践者の感想（自己評価）・実践上の課題等

地域に何かを広めよう、伝えようとするとき子どもを通して活動すると広がりやすい。しかし、学校に行く機会は非常に少なく、敷居の高い感がある。実践しようと思っても、「誰に相談すれ

ばいいのか?」「場づくりはどこですか?」という迷いが先立つ。地域にいる我々と学校を結ぶシステムがあれば、もっとニーズに応じた活動ができると考える。

β. 地域こども教室サポート活動

●目的 地域子ども教室のサポートを通して、地域の子どもたち・保護者とのつながりをつくり、地域教育力の向上に努める。

●参加対象 板野東小学校区児童・保護者（にこにこ東っ子クラブ）

●期日 平成18年11月18日（土）Let's study cooking

●場所 板野町町民センター

●講師 K・S・Y

●準備物 材料・エプロン・食育教材等

●行動目標

- ・地域子ども教室のサポートを通して、地域の子どもたちと知り合う。
- ・子どもたちを通して、保護者や地域の人たちの輪を広げる。
- ・料理実習を通して、食べる楽しさを伝える。

●プログラム実践に向けて

平成18年11月9日（日）Let's study cooking リハーサル

●参加した子どもたちの表情・様子（K氏の感想より）

グループごとに、分担を決めて楽しそうに料理に挑戦していた。自分たちで作るカレーに大変満足した様子であった。「できる」ことを発見した子どもたちは、次に何かに挑戦しようとする気持ちが湧いてきているようであった。

●プログラムの成果

- ・新しく町内に越してこられた方々とも知り合いになることができ、有意義であった。
- ・活動を通して、会話もはずみ、保護者との連携が深まった。
- ・「いただきます」の意義を話すことにより、「感謝して食べる」ことについて考える子どもの姿が見られた。

●今後の課題

- ・年間を通して計画的に Let's study cooking 講座を開催する。

- ・多くに人に知ってもらえる広報を工夫する。

- ・学校等との連携。協力し合える体制づくり。

●プログラム実践者の感想（自己評価）・実践上の課題等

- ・参加する子どもたちが限定されている感がある。行事が一部の人だけのものにならない工夫が必要である。

- ・保護者・サポーター等との連携を深め、年間を見通し、サポートできる体制作りが必要である。

6グループすべてが、地元における実践活動を組織し、実施したことは、賞賛に値しよう。本プログラムの狙いは、この一事をもって達成されたと言える。

実践活動は、食育3件、防犯、昔遊びの伝承、健康づくりが各1件であった。それぞれ切実な関心に基づいたものであるが、何よりも<自分たちでできること>に重心を置いた、その意味で、身丈にあった実践活動であったと言えよう。

詳述した2つの事例は、目標設定から評価までのマネージメントサイクルについて、自覚的に取り組まれた好例である。いずれの事例においても、地域における各機関との連携の重要性が指摘されていることは特筆すべきであろう。また、今後の活動の広がりを見据えた課題意識が吐露されていることにも、留意しておきたい。

なお、最終日のプレゼンテーションは時間的な制約の中で行われたが、各グループとも、役割分担を定めた要領のよい、スムーズな進行であった。また、PowerPointを駆使した例、OHCとポスターを併用した例など、IT能力の発揮という側面でも注目すべきものがあった。任意研修の成果も、その一部を形成しているであろう。

c. リーダー養成プログラムの課題

上記のアンケート結果や実践発表の内容等を踏まえて、プログラムの課題について整理しておこう。

第一は、実践活動期間を取り入れた研修方法についてである。

「学んだことを地域で活かせない」という課題の解決が、本講座の大きなねらいであった。するために、今までの研修では取り入れる機会のなかった実践活動期間を設けた。地域活動を起こすためのスキル学習とプランづくりの後、7ヶ月の期間をおき実践期間とした。実践を前提とした学習では、机上の学習で終わるのではなく、実践を見通した協議・質疑応答が行われた。プレッシャーもあったであろうが、「できることから取り組むことで、仲間ができ、動きやすくなった」という感想が聞かれた。

ところで、実践の輪を広げるためには、他の地域やグループとの交流を深める必要がある。今後のプログラム作成に際しては、地域間（グループ間）交流の機会を導入する必要があろう。

第二は、新しい出会いを内包したグループづくりについてである。

実践機会を取り入れた研修方法により、「地域で何かを起こそう」とする意識が高まった。反面、「何もできない」と思いこむ受講生もいて、両者の温度差も大きかった。そこで、実践プログラムの計画時に、同じ地域・グループからの参加者は回避し、初めて顔を合わせるメンバーでグループを構成した。

その結果、最初傍観していた受講生も、積極的に活動する仲間に刺激され、自分にできる活動を模索するようになった。「活動につながらない」と考える受講生は、「何から」、「どのように」動き始めることが、活動につながるのかについて気づいて多いことが多い。実際には、同じグループに

おける他の受講生の活動情報から、「これなら自分にもできる」ことに気づき始めたようであった。

「『活動』とは特別なことをする事ではなく、毎日の生活の中で当たり前にしていることを、他の人に伝えることですね」と発言する受講生の言葉が印象的だった。講師から学ぶことと同じくらい、受講生同士から引き出し合うことは多い。「答え」は書籍や講師の中にあるのではなく、自分自身の中にあることを受講生が実感する研修が理想である。今後においても、そうした学習者中心 (student-centered) のプログラムを企画したい。

第三は、プランニング過程についての知識についてである。

「地域での活動を見ると、新しく始める活動より今まで通りの活動を続けることが多い」との声を聞く。多くの受講生は、今回のようなプランニングの過程を学ぶ機会は初めてであった。受講生から次のような感想があった。

「5W1H（いつ　どこで　だれが　だれに　なにを　どのように）を改めて考えることによって、目標がはっきりした。」

「行動目標という言葉を意識したことは今までなかった。行事を計画する上で、大切なことを学んだ。」

「なんとなくうまくいったとかうまいかなかった、という感想はもっていました。しかし、具体的に自己評価することで、次の実践活動がより計画しやすくなると思った。」

「具体的な目標・具体的な評価の大切さがよくわかりました。」

このように、今までの経験に理論が裏打ちされ、さらなる意欲をかき立てることができた。

第四は、広報の重要性についてである。

実践上で必ず課題となるのは、「いかに人に参加してもらうか」である。どれほど素晴らしい企画であっても、多くの人がその場に参加し、同じ空間・時間を共有することができなければ烏有に帰するであろう。多くの受講生が広報に苦労している。実効性のある広報はどのようにすれば可能なのかについて、実践と検証過程とを組み合わせた、体験的な学習プログラムを開発する必要がある。

第五は、専門機関・関係機関との連携の方法についてである。

近年「学社融合」という言葉が流通しているが、実際には、地域で活動する受講生にとって、学校への門戸は身近ではない。先に紹介した「学んで伝える阿波踊り体操」を実践したT氏も、最初の段階で、小学校へのアプローチに戸惑った。一度つながりができると、活動は進むが、そこには至るまでのプロセスに潤滑油ないし触媒となるものが欲しい。「学校の安全」が大きく呼ばれる今日、地域住民が学校へ協力を要請することの難しさも、一方では存在する。今後の研修では、こうしたリアルでありながら、微妙な現実にも視野を広げ、側面から支援する視点を持つ必要がある。

第六は、世代間交流の促進についてである。

地域活動の中心的な存在である受講生から、「若い世代の参加・協力を募りたい」という声が聞

こえる。地域活動が一時的な取組みに終わらず、持続的・継続的に展開していくためには、困難ではあるが、若い世代を組織化し、世代を超えた交流の機会を設定する必要性がある。

第七は、実践段階におけるモニターと助言についてである。

今年度は、企画立案から実践までの7ヶ月の間に、3種類の任意研修を組み入れただけであった。その間、受講生の間では、実践に当たって解決を急ぐ具体的な諸問題がわき起こっていた。この期間に、進行状況を報告し、助言を得る機会があれば、さらに実践への意欲と質が高まると思われる。担当者や講師からの助言が、求めに応じて受けられる機会を設ける必要があろう。

2. 地域リーダー養成プログラムにおける大学の関与の実態と課題

前章では、平成18年度徳島県女性地域教育推進者養成講座における目的と方法について、その実態を記述し、諸課題を抽出した。

本章では、センター主催による、他の地域リーダー養成プログラムについても取り上げる。その上で、企画・実施・評価のいわゆるマネージメントサイクルの諸過程と、そこにおける大学の関与の実態、並びにそこから浮び上がる課題について考察することにしたい。

さて、結論を先取りして述べるならば、大学と行政のコラボレーションは、現状では初発的段階にあり、大学が今後どのように関与するかについては、実践の累積を通して、方向づけがなされる以外はない。そのプロセスにおいては、双方の現実的な意向が尊重されるべきであろう。理念的・観念的な“るべき像”が先駆的に設定され、その枠組みに現実が規定されることは回避さるべきであると考える。仮にこうした理念型がありうるとしても、現実をラディカルに動かすモーメントとはなり得ないからである。

(1) 平成18年度プログラムにおける関与の実態

a. 各プログラムにおける関与の類型と度合

センターの主催する地域リーダー養成事業は、上述（表1）の通りである。

この内、次の5プログラム（②-④については対象者別）を取り上げ、そこにおける大学（人）の関与が認められる事項を抽出すると、次のようにある。⁴⁾

表4. プログラム別大学（人）の関与の有無と役割

① 子どもの学びの場づくりコーディネーター研修

日 程	内 容	関与の 有無	大 学 (人) の 役 割
6月24日	オリエンテーション・基調講義・事例発表・シンポジウム	有	基調講義・司会=コーディネート
7月1日	講義・事例発表・シンポジウム	有	講義・司会=コーディネート
7月15日	現地研修（にじの会）	無	（現地研修参加）

7月29日	現地研修報告・事例発表・ワークショップ	有	司会=コーディネート・ワークショップ指導
8月5日	ワークショップ・活動計画発表	有	司会・ワークショップ指導

(2) 家庭いきいき支援者養成事業（ステップアップ研修コース）

日 程	内 容	関与の 有無	大 学 (人) の 役 割
7月15日	講義	有	講義
8月5日	講義・ワークショップ	無	
9月2日	講義	有	講義
9月30日	講義・カウンセリング演習・班別学習	有	演習
10月1日	判別学習・事例研究・発表	無	

(3) 家庭いきいき支援者養成事業（乳幼児支援者養成コース）

日 程	内 容	関与の 有無	大 学 (人) の 役 割
9月9日	講義	無	
9月16日	講義	有	講義
9月23日	講義	有	講義
10月7日	講義	有	講義
10月21日	カウンセリング演習	無	

(4) 家庭いきいき支援者養成事業（思春期支援者養成コース）

日 程	内 容	関与の 有無	大 学 (人) の 役 割
10月28日	講義	有	講義
11月4日	講義	有	講義
11月19日	講義・講演	有	講義
12月2日	講義	有	講義
12月16日	カウンセリング演習	無	

(5) 徳島おやじ塾 出番ですよ！子どもと遊ぼう

日 程	内 容	関与の 有無	大 学 (人) の 役 割
6月25日	講義・ワークショップ	無	
7月1日	講義・演習	無	
7月8日	講義・実習・ワークショップ	無	
7月29-30日	キャンプ実習	無	

全24コマ中、大学が関与したコマ数は14、全体の6割弱（58.3%）となっている。大学がすべての局面に関与する理由（必要）はないので、これだけでは多いとも少ないとも言えない（女性地域教育推進者養成講座を加えても、全29コマ中16コマで、55.2%となる）。なお、関与の具体的なあり方については、講義が11、ワークショップ（演習含む）が3、司会＝コーディネートが4（役割が同一コマに複数ある）となっていて、講義中心の関わり方であることが分かる。

一般に、行政主催のプログラムにおいては、担当者が前年度（及びそれ以前）のプログラム内容や実績を勘案してテーマを設定し、内容に合致した講師をリサーチして選択する。講師交渉の過程で、プログラムのコンセプトを説明し、内容・方法について若干の協議を交わして、実施に移るというのが普通である。

センターにおける主催講座も、全般的にはその域を出るものではない。筆者の経験からみても（筆者が関与した女性地域教育推進者養成講座と子どもの学びの場コーディネーター養成研修を除いては）、担当者主導型のプログラム設定であったと言えるだろう。計画、実施、評価のマネージメントサイクルのそれぞれの環において、具体的なデプス（depth）にまで立ち入って大学が関与することは、殆んどないのが実情である。

この間の事情を、評価論（診断的評価－形成的評価－総括的評価の三段階説）に即して考察すると、次のように言えよう。

まず第一に、診断的評価は殆んど皆無といわざるを得ない。プログラムが開始される前段階での評価は、受講生の属性や要望、学習（実践）歴等を知ることによって、構想段階のプログラムを実行段階に改変する有力なデータを提供するはずである。それによって、受講生に適合性の高いプログラムが提供される。しかし、担当者と講師の共同作業を通して、そこまでの作業を行うことは、実際には極めて稀である。

プログラムの進行中に行う形成的評価についても、同様である。一コマが終わって、その内容・方法に対する受講生アンケートを配布し、回収するという光景は、今日いたるところで見受けられる。しかし、結果を集計し、講師にフィードバックするとしても、そのデータに基づいて、講師と担当者が次のコマの内容や方法を再考し、修正するというプロセスに繋がっていないケースが多い。

総括的評価についても、同様である。多くのプログラムは、元々単発のサブテーマの集積に過ぎない。各コマは、担当者にとっては連続性があっても、指導する講師にとっては、その場限りのものである場合が殆んどである。従って、実際の場面では、内容や方法について、修了後に“出来具合”に関する簡単な会話を交わす程度が普通である。受講生に対する総括的アンケートを実施し、その結果を送付することで、講師への“務め”を果たす場合もあるが、講師自身に対して総括的評価を要求するケースは全くない。専用の総括的アンケートを配布し、回収して分析したり、全般的な評価について討議したりすることは、次のプログラムの企画にとって不可欠の過程である。しかしながら、講師は全体のプロセスに関与していないので、アンケートを求められても、答えることさえできないのが現実であろう。

因みに、各プログラムの“問題点”と“今後の処理方針”を記した次の記述は、行政内部の評価のあり方を端的に示していると言わねばならない。ここでは、予想されるように、集客・広報や内容・ニーズにおけるミスマッチなどの問題点が指摘されるに留まっている。

表5. 担当者による「問題点」と「今後の処理」

① 子どもの学びの場づくりコーディネーター研修

問題点	今後の処理方針
・年度末の募集となり応募者が少なく、再募集となった	・日程を8月とし、募集は4月中旬とする
・他の行事や講座と重なり、断念した人もいた	
・自然体験活動コーディネーター研修において、講師の指導内容と参加者のニーズが合わなかった	・2つの研修を子どもの遊びの場づくり、コーディネーター研修として実施する

⑤ 徳島おやじ塾 出番ですよ！ 子どもと遊ぼう

問題点	今後の処理方針
・予算や会場の関係から、参加者を25組程度としたが、ニーズの割に参加希望者が少なく、講座のあり方を検討する必要性がある	・平成19年度にも実施予定
・母子家庭への配慮（募集・参加希望への対応）	・平成19年度にも実施予定。アンケート調査による希望が多いのと、参加する男性保護者の時間的負担を軽減させるために、屋内教育施設での泊付研修を実施する
	・社会的にニーズの高い、コミュニケーションスキルを内容とした時間を設ける

②-④ 家庭いきいき支援者養成事業

問題点	今後の処理方針
・ステップアップ研修の内容について、検討が必要	・（乳・幼・思）のコースも合わせて受講する者がいることから、講師の重複を避ける、受講資格を絞る等の対策が必要
・関係機関に案内を送付しているが、機関によっては、対象者に届くまでの時間がかかり、締め切り後問い合わせがあった	・ステップアップ研修を別（コミュニケーションスキル）の講座内容とする予定
・申し込みから講座の実施までの期間が長く、実施の遅い講座ほど、受講者の状況の変化（就職、家庭状況）からキャンセルや未受講が多く発生した	・できる限り早く案内を作成・発送すると共に、広域媒体等を積極的に活用し広報に当たる
・受講者の職業やキャリア、年齢の幅が広く、主催者側の意図と受講者ニーズのミスマッチが一部見られた	・解決は困難であるが、現時点では特に問題はない。申し込みの状況によっては、キャンセル待ちや追加募集の広報を行う
・プランニング時に、講座内容について関係講師との相談・連携がしにくかった（担当が代わったため）	・募集時に講座の趣旨の徹底を図る
	その他 ・講師、託児スタッフの確保が困難になる可能性がある。特にコーチングについては県内に講師となる人が少ないので、県外から求めることとなる ・同一講師が複数回登場することについては内容に もよるができるだけ避けることが好ましい ・平成19年度も実施予定

これらの実態を図化すれば、次の通りである。

計画時	殆んどなし
実施時	あり（講義主体）
評価時	殆んどなし

図2. マネージメントサイクルにおける大学の関与

b. 担当者による総括的評価

各種プログラムのうち、「子どもの学びの場コーディネーター研修」については、「女性地域教育力推進者養成講座」と共に、プログラム終了後に担当者に対するアンケート調査を実施した。この結果は、いわゆる総括的評価に属するものであるが、主要な回答について対照表の形で整理しておこう。⁵⁾

表6. 担当者による総括的評価・対照表

*事業の立案過程に関する設問 (問4)	子どもの学びの場づくり研修	女性地域教育推進者研修
講師の選定について（問4b）	県内在住で、子どもの居場所づくり、読書推進活動、自然体験活動においてリーダー養成を経験し、実績のある人を選んだ。	<ul style="list-style-type: none"> ・参加型・体験型の研修を行う講師 ・自分の体験を話される講師
目標の設定について（問4c）	<ul style="list-style-type: none"> ・学校、家庭、地域、行政等が連携して地域の持つ教育力を再生し、自然体験活動や社会体験活動、読書推進活動等の子どもたちが安心して学べる安全な地域の学びの場を作るための人材を養成し、地域の再生を図る。 ・実行委員会により推薦されたコーディネーターあるいは地域で子どもの居場所づくりをしようと思うものは、県が開催する研修において、組織づくりや関係機関との調整事業の申請や執行の方法について学び、それぞれの地域で実施する子どもの活動を企画する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだことを地域活動で活かすことができる ・自分のなかにあるリソースに参加者自身が気づく研修 ・ネットワークづくりのできる力の養成
集客について（問4d）	実施の前年度に各市町村教育委員会に事業説明を行い、広報した。年度末・年度初めの依頼で参加希望者が少なく、再募集をかけた。 具体的なプログラムで広報をすれば、集客はスムーズにいったであろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・徳島県婦人団体連合会（婦人会）を通じた広報 ・徳島新聞イベント情報を通しての広報
受講成果の活用について (問4f)	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの地域の実態に合ったものとして、企画・運営できたらいい。 ・徳島県生涯学習情報システムの指導者情への登録、他の事業への参画・推薦等を行った。 	地域での活動実践につながる研修の企画
その他の留意点（問4g）	NA（無回答）	・現地研修を取り入れる。

		<ul style="list-style-type: none"> 学んで伝えることを意識した研修… まわりに伝えられる感動がある研修を企画
*運営過程で気づいたことについて（問5）	<ul style="list-style-type: none"> 自然体験活動コーディネーターについての受講者の思いは様々で、指導者の目指すと受講者のニーズの開きがあった。 今後は他行事との重複等を配慮した計画努めたい。 	NA
*運営過程での対応について（問6）	<ul style="list-style-type: none"> 指導者側の学習内容・レベルの変更対応した。 ビデオ等による代替措置を講じた。 	NA
*学習成果について（問7）	今後修了生の集いをもつなど相互の情報交換を通して、地域における取り組みを深めるため支援したい。	<p>地域活動への意欲向上は図られた。</p> <p>実践への足がかりになった事業である。</p>
*今後の地域リーダー養成事業について（問8）	当センターを中心として講座を持つなど、更に発展させたい。	<ul style="list-style-type: none"> 地域活動の継続性 ネットワークづくり
		<ul style="list-style-type: none"> 若い世代との連携 有効な広報活動の方法等について、学ぶ機会を企画したい。 事業企画の段階での連携をさらに深めたい

ターゲット設定や目標設定、内容の組み立てや方法論等において、全く別個のプログラムでありながら、担当者の狙いや意図、苦心等が良く表れた結果となっている。今後の展開についても、極めて意欲的である。

(2) 大学の関与に対する評価と課題

a. 担当者アンケート調査の結果

上記総括的評価においては、大学との協力関係に関する現状評価や今後の見通しについて尋ねた。結果は、次の通りである。

表7. 大学との協力関係に対する現状評価と今後の展望（総括的評価より）

大学との協力関係に対する評価（問9）	子どもの学びの場づくり研修	女性地域教育推進者研修
	総合コーディネーターの手腕により、問題はなかった。	教授によるプランニングの学習は、参加者にとって新鮮であり、実践への意欲付けとなつた。
今後における展望（問10）	<ul style="list-style-type: none"> 大学と教育委員会との連携による事業 それぞれの立場があるが、啓発・広報・情報収集など互いに協力し合い、連携を深めていきたい。 講師派遣 	講師派遣

現状については、ポジティブな評価と見てよいだろう。ただし、当該プログラムに関しては、センター設置以降、担当者と筆者（廣渡）との連携実績があり、プログラムの立案時を含めて、再三にわたる情報交換・意見交換がなされてきた。両者間の意思疎通がスムーズであったことの影響が大きいと思われる。

b. 大学の関与に関する課題：まとめにかえて

センターにおける地域リーダー養成事業は、センター設置以降の生涯学習事業の中心を占めるまでに成長してきた。当該事業が更なる発展を遂げるためには、第一にセンター職員の力量と意欲、更にはそれらが発現しやすい職場環境（財政措置も含めて）が、持続的に整備されることが重要である。その上で、外部リソースの一つである大学（人）がセンターの事業企画にどのように関わればベストな連携関係が構築できるのかが、問われることとなろう。

大学と行政との連携は、生涯学習事業にとどまらず、本県においても幅広く展開されているのが現状である。近年では、徳島県と徳島大学との連携協議会が発足し、防災問題やIT関連事業等において、共同事業を進めつつある。県職員研修における協力関係も含めて、連携事業は枚挙に遑がない。しかしながら、こうした密接な連携事業の実態について、原理的諸問題にまで深く踏み込んだ議論は少ない。現状は一種の政策的動向の中で、流行の波に乗り遅れまいとする、言わば状況主義的な対応がなされているように思われる。

センターとの関係についても、単にあらゆる場面で大学が関与することが望ましいのではなく、連携の局面や度合を合理的に設定すると共に、実践を通じてその効果やあり方を客観的に検証する必要がある。無論、こうした対応の前提には、大学と行政の双方に、連携に関する同様なスタンスが共有されている必要があるのであるが、現状では不十分と言わざるを得ない。

原理的に言えば、第一に、連携に何を期待するのかが、初めに問われなければならない。連携の当事者が、それぞれ合理的かつ主体的な理由>を保持していることが必要である。⁶⁾

第二に、双方にとっての<主体的な理由>は、コミュニティにとっての利益の最大化という命題に即して検証されなければならない。どのように連携すれば、人々（県民）にとって価値が生まれるのかについて、それぞれ厳しく問い合わせる必要がある。

第三に、連携が成立する基盤があるのかどうかについても、冷静に吟味される必要がある。それは、財政的な側面のみならず、人事的な側面や物的な側面についても問われる必要があろう。何一つリソースが準備されないままに、連携だけが強調されると言う倒錯した状況に甘んじるならば、長期的に見れば、連携関係の実質を解体し、双方の信頼関係を損なう結果に陥る可能性がある。

さて、本稿のテーマである地域リーダー養成事業においては、地域（家庭を含めて）の再生、地域における人間関係の修復と新生、が究極の目的であった。その意味では、地域課題や学習課題に関する認識、課題解決への方法論にとどまらず、根源的な価値意識（何がプラスであり、何がマイナスなのかという）の共有という事態すら、想定する必要があるかもしれない。しかし、徒に思考

の枠組みの一致を求めるることは、双方の立脚点を掘り崩すことになりかねない。むしろ、双方の違いを認識した上で協働を模索すべきであろう。

仮説的に述べるならば、大学が関与する意味は、恐らくは、あらゆる連携の局面において、課題意識の共有化を促進すると共に、連携の実態を対象化すること、それによって事業の質のみならず、連携それ自体の質的向上に貢献することにあると言えよう。

尤も、現実の連携場面においては、パートナーに対する期待値をプラグマティックな意味で満足し、成功感を共有することが必要条件となろう。差し当たり、そうした期待値が満足できるように、それぞれの力量を高めることから始める他はない。また、その前提として、双方に十分な信頼関係が構築されていることが必要である。

注

- 1) 『徳島県教育振興基本構想 徳島「学び」プラン21 育てよう一人ひとりの輝く徳島』徳島県教育委員会、平成12年3月、より。
- 2) 赤尾勝己・山本慶裕（編著）『学びのデザイン 生涯学習方法論』玉川大学出版部、1998年、15頁。
- 3) 「満足」・「やや満足」に関する具体的な意見・感想は、次のようにあった。

<第1回目>

- ・いつも自分の話し方が気になっていたので、今日はとてもいい勉強ができました。ためになる研修をしていただきありがとうございます。
- ・実践に基づいた講義内容は重みがあり、印象深いです。改めて、人と人のコミュニケーションの取り方の大切さを痛感しました。
- ・今まで希望でしたが、なかなかこのような（プレゼンテーションの組み立て）研修は受けられませんでした。よかったです。
- ・言葉の説明の大切さを実感しました。絵を書く実習は地域で集まったとき試してみます。
- ・事前準備・下準備の大切さがよくわかりました。
- ・話し言葉と書き言葉にはちがいがあることははっきりわかりました。
- ・話しに見出しを付ける…この発想を大切にします。
- ・今まで研修会をしても、私語が非常に多いことが気になっていました。声のトーンに気をつけるだけで、人を引きつけることができるることができることがわかりました。
- ・主語と述語をなるべく近づけることで、わかりやすい日本語になることに気づきました。
- ・プロの方に指導していただき、ほんとうにいい勉強になりました。
- ・素敵な話のできる人を目指して、努力したいと思いました。来週には、小学生との話し合いの機会があるので、実践してみます。
- ・もう少し、実習を入れていただくとよかったです。

- ・2年前にこの研修を受けていれば、「話のよくわかる婦人会長…」と呼ばれていたのに…と思うと残念です。
- ・人前で挨拶することがよくあります。平木先生の研修を受けて、自分がいかに無駄な言葉をたくさん入れていたか、そして、それがいいことのように思っていたかに気づきました。相手を意識した話しをしたいです。

<第2回目>

- ・こういう機会がなければ、ハンセン病のことも知らないままでした。
- ・今日お会いした方々が明るく前向きに生きておられるのに接して、感動と自分自身も大いに励されました。一日も早く偏見のない社会になれば、と思いました。
- ・直接お会いできたことが、なによりうれしかったです。元患者さんの思いを、伝えていくのが私の仕事だと思いました。
- ・県人会のみなさんに元気をいただきました。まだまだ努力していくと思いました。
- ・施設の広さに感動しました。
- ・トツトツと話される県人会の方の言葉「しゃもじのような手に鉛筆をヒモで縛って書いた点字」「生きていてよかった」という言葉が胸にのこり、涙が溢れました。
- ・本音の話が聴けてよかったです。
- ・日本に、こんな世界があったことをわたしは知らずにいたことが恥ずかしい。
- ・ハンセン病については、機会あるごとに勉強して参りましたが、今日の研修はずいぶん勉強になりました。今後も、このような研修を続けてください。
- ・わたしはハンセン病に関して、まちがった考えをもっていました。プロミンで救われてよかったです。今日勉強したことを、帰っていろいろな人に話、理解を深めたいです。
- ・自分の生き立ちなどを話していただき、胸が熱くなりました。私自身、たいへんいい勉強ができました。
- ・社会の目、家族のあり方について考えさせられました。感謝の気持ちの大切さを感じました。
- ・ハンセン病に対する今までの暗いイメージが変わりました。参加してよかったです。
- ・参加し、自分の認識を改める機会に“アリガトウ”“オゲンキデ”を繰り返し繰り返し送ります。
- ・数十年もの隔離された社会での人生を送られた方々の胸の内を思うとき、その無念さはどうてい計り知れないものがあると思いました。せめて、私たちに今後何ができるかを考えていきたいと痛感しました。
- ・私たちが、ハンセン病についてまず正しく理解し、伝えていくことが大切だと思いました。
- ・今日の気づきをもっと早くたくさんの人々にひろげていきたい。

<第3回目>

@徳島県立防災センターでの研修

- ・体感できる研修でよかったです。地震・煙等思った以上に恐ろしいです。改めて防災の必要性を感じました。
- ・備えあれば憂いなし…早速実行します。そして、家族や近所の方にも伝えます。
- ・体験であれだけ怖いのですから、実際に生活の中で起きた場合、命の危険を感じました。
- ・家族や近所の人たちとまた来たいです。
- ・自主防災の必要性を実感しました。
- ・日ごろから、常備袋の点検をしなければと思いました。そして、まわりにも呼びかけることが必要だと思いました。

@板野西部消防組合救命士による研修

- ・今日の研修は、推進者にとって必要な内容だったと思います。防災・救命について学習し、緊急の時役立てればと思いました。
- ・救命講習は日進月歩で、学習することが多い。たびたび受けたい。
- ・AEDの講習を受ける機会がもて、よかったです。今後に役立てます。
- ・町内でのAEDの設置場所一覧図が欲しいと思いました。
- ・知ることができたので、今後心にゆとりをもって対応できます。
- ・聞くのと、実際に体験するのでは、ぜんぜんちがいます。とても有意義な研修でした。
- ・話にはよく聞いていた心肺蘇生法やAEDですが、実践して初めてわかることがいっぱいありました。
- ・グループでの講習でたいへん和やかな雰囲気の中にも、真剣さがありよかったです。

<第4回目>

- ・グループの話し合いの機会がとてもよかったです。
- ・班分けて、皆さんとうち解けて話し、いっしょにプランづくりができてよかったです。
- ・昨日イベントの計画を立てたのですが、帰ってさっそく皆で練り直します。
- ・日ごろしていないことなので、すごく集中するのが難しかったのですが、作業するようになつて力が入ってきた。
- ・実技もありユーモアもありよい講義でした。
- ・アイスブレーキングでごく和気藹々とした雰囲気になりました。
- ・あれだけの短時間にあれだけのポスターやチラシの作成ができるのはびっくり。
- ・発表の場では、皆さんと楽しいひとときをもちほんとうに楽しかったです。
- ・グループワークでは単なるおしゃべりではなく、建設的な意見が飛び交いました。
- ・今までに、実践プランなどに関わったことがないので、とても新鮮でした。

<第5回目>

- ・社会の動きに対応した家庭婦人としての取組、女性にできる地域活動がどうしたらまとまるかをもっと知りたいです。
- ・グループ活動を通して、今までと違って情報交換ができ、勉強になりました。
- ・知らない方々との研修…顔見知りができ、つながりができました。このような研修はもっと続けて欲しいです。
- ・みなさん大変活発です。私も見習って前向きに地域のみなさんと助け合いできることから取り組んでいきたいと思いました。先生のお話にもあったように、自分から楽しくするようにしていきたいと思います。
- ・みなさんの地域を考える熱心な取組と工夫された実践に対して敬服しました。少しでも近づけるよう努力をしたいです。
- ・様々な各地の情報や交流が得られ、予想以上の学びの場になりました。お礼を申し上げます。
- ・婦人会で幼児期の食育で調理実習を計画しているので参考になりました。
- ・同じ班になった方々と地域が離れすぎて、実践ができなかつたことが残念です。
- ・実践プランづくりから実践発表とたいへん参考になった研修でした。意欲ある方々とお知り合いになれ、がんばる力をもらいました。
- ・いろいろな活動があることを知り、心あらたにこれからがんばりたいです。
- ・世相に応じた問題を学習できました。
- ・いい刺激を受けることができました。
- ・たくさんの情報・人脈を得ました。やはり人間っていいな～。
- ・一つのイベントをするにも専門的知識を持っている人をどう組織化し、引き入れていくかが大切と先生がおっしゃっていましたが、まさにそれが私の地域に足りなかつたと思います。そのことを地域に持ち帰り活かします。
- ・自ら発表する体験やグループでのコミュニケーションができたことに感謝します。
- ・活動するには仲間が必要なことを実感した。

- 4) 各プログラムの内部文書及び広報用チラシから作成。
- 5) 「徳島県立総合教育センター主催 地域リーダー養成事業に関するアンケート調査」(2006年2月実施)の回答から抽出した。回答は、担当者及び班長から得た。なお、同調査は、廣渡により、事後評価のためのヒアリングの代替として実施したものである。
- 6) 筆者(廣渡)はかつて、大学間連携のあり方について、大学自身の連携に対する<主体的な理由>こそが、明らかにされなければならないことを主張したことがある。産官学の連携が大学のサバイバル戦略に躍り出て、そのこと自体の妥当性や問題性を吟味することもなくなった現状においてはなおのこと、連携にまつわる原理的諸問題を執拗に探求すべきであると考える。

そのこと自体、大学自身のアイデンティティを模索する試みとなるからである。廣渡修一「大学間連携 必要か不要か?」『社会教育』(第57巻第4号), 全日本社会教育連合会, 平成14年4月, 50-52頁, を参照。

< Abstract >

This paper examines the actual circumstances and issues of training programs for community leaders, such as the course for training female community facilitators, promoted by the Tokushima Prefectural General Education Center. The paper also looks at the result of program evaluations that are conducted among the program planners and students. In addition, the study discusses the relationship between the Center and the University of Tokushima, based on the actual program management cycle. The present state of its relationship has just reached an early stage and remained as a big issue to be solved. It is therefore necessary for both the Center and the University to share recognitions on the current conditions, make continuous efforts for their actual collaborations, and single out their foremost tasks as an object of their studies. Lastly, it is pointed out that those involved should pursue the genuine relationship which is meaningful for both, while trying not to be buried in the recent political climate.